

会員だより

「枚岡神社」に初詣
六十二歳以上は
なぜ厄がないの？

今年の初詣は1月4日に行きました。出来るだけ駅から近いところを探して東大阪市にある「枚岡神社」に決めました。鶴橋から奈良行きの各駅停車で枚岡駅に降り立ちました。改札を出て階段を上ると目の前に神社への階段。



枚岡神社の階段と二の鳥居

近いもんじゃなくて、駅と隣接と言ってもいい位置です。しかし喜んだのも束の間、20段くらいの階段を上ると目の前には延々と階段、坂、また階段、神社の社殿は見えているのに、どうしてあそこまでたどり着けるのか、困ってしまいました。ここまで来たけど引っ返そうかと思いましたが、でも折角来たんだからせめて鳥居の前まで行

ってみようと思いきや歩き出しました。休み休みやつと鳥居の前まで来ると、社殿の前がまた急な階段です。これはとても私には無理です。他に緩い女坂？はないのかと見回すと、右手に坂道があります。しかしそれは帰り道なのです。見ていると1月4日に来てよかつたのでしょうか、そんなに混んではいけません。「掟破り」を自覚しながら人の流れに逆らって手すりに捕まりながら登りました。傍らを見ると、厄除けとそのお祓いの表示があります。13歳から18歳、19歳と最高は62歳まで約50ほどの年齢が厄年なのだそうなんです。これだと大方の年は厄年ですか。62歳以上は厄はないのかな？。厄の方が寄り付かないのかななどと考えながら、ふふふと笑いがこみ上げました。やつと社殿にたどり着き参拝しました。

プレハブの部屋にはすでに布団がずらりと敷き詰められていました。2時間くらい飲んで騒いで部屋に帰ると大変なことが起こっていました。みんなの財布がなくなっていたのです。大騒ぎになりました。「いくら入っていた」とか、「お金以外になくなったたら困るものが入っていた」とか被害は確か12人程だったと覚えています。幸い私はカバンの底の方に財布を入れていたので助かりました。布団の中にバックを隠していた人もいてみんなから賞賛されていました。警察も来しました。結局犯人はわかりませんでした。後日、主催者からいくらかの補てんが出て一件落着となりました。凶らずも、初詣に行つた昔のことを思い出しました。

記・牧戸富美子

沢木耕太郎著

「深夜特急」を読んで

最近、同年代の友人達から「返却不要」の本が時々回って来る。私と同様に、本を含めて終活の必要を感じての事だと思いが、本を自分の手で処分するのは気が進まないのでは・・・と想像している。そんな本の中の、今まで関心があつ



深夜特急全6巻

て読む機会がなかった。「深夜特急」を読んだ。「深夜特急」は沢木氏が20代の頃(現在70代)にバッグパッカーでニューデリーから、ヨーロッパ大陸の最果ての地ポルトガル、サグレス迄乗り合いバスだけを使い継いで行つた旅行記です。この作品は帰国数年後に書かれたようで、多分メモを残していたと思う。国境近くのバス停で下ろされ、検問所迄、2キロ以上も歩き、入国が出来るかどうか不安になったりしたが、幸い拒否された事はなかったようだ。常に所持金(多分ドル)の残額を頭の中で計算して、宿泊料金や食事の料金の安い所を探した様子が詳しく書かれているのには、感心する。時には英語の苦手な宿泊施設の経営者に頼まれてバスの到着時間にバス停に行き、客引きをして宿泊代を無料にして貰ったりする。時には安いと思つて

行つた宿泊先は一部屋に10台ぐらいベッドが並んでいてがっかりする。その部屋のベッドの一つに数日間食事にも出て行かず、寝たまの外国人がいて気になり、果物を買って来てあげるが礼も言われないので、多少腹を立てるが、数日後に元気を取り戻したのか次の目的地に向かつて出発したのを見て安心する。旅の最終地と思つていたポルトガルの最西端の岬サグレスで、作者は民宿風なホテルに3日間滞在し、他の国になかった品格と人情深い接待を受け、ここで旅も終わるかと思わせた。しかしポルトガルのサグレスから船に乗つたものの、また旅心が湧き、スペインの各地をまわり、再び長距離バスに乗り、遂にパリにたどり着く。その後、たまたま、道で出会つた青年に安いホテルを聞くと、自分の友人の部屋を暫くの間一緒に使わせてくれると言う。感謝して数日間パリで過ごす間、居させて貰う。再びロンドンへの長距離バスに乗り、いよいよカレーからドーバー海峡を越え

て(正確には潜つて)ロンドンに到着する。旅行中、もし無事にロンドンに到着したら、日本に「無事にロンドンに到着せり」と電報を打つつもりでいたので早速、郵便局に行くが、ロンドンの郵便局では「電報を扱わない。電報は電話で打つて下さい。」と言われて驚いた所でこの旅行記は終わっている。実際、空ダイヤルを回したのはアルファベットに直せば「ware touchaku sezu(我到着せず)」作者の心の旅はまだ続くのかもしれない。



近くの万博公園 夜の太陽の塔

世界の貿易による富を手にし、キリスト教布教の名目で訪れた国々と文化の交流を持ち、とりわけ戦国時代から日本とのつながりの深かつたポルトガル。私と妹も体力のある間にポルトガルに行きたいと思案中です。(筆者は吹田在住の方で原稿に「夜の太陽の塔」の写真が添えられていました) 記・写真・山田 昭子